ご恩の人生ー聴聞の大切さ

今から十数年前、あるお寺で、一派の管長さんをお招きして大きな法要が催されました。

管長さんは多くの檀家さんを前に、「父母の恩」「社会の恩」「師の恩」「人々の恩」について法話をされました。

それを聞いていた一人の大学生が手を挙げて質問したのです。

「私は恩なんて必要ないと思います。社会の恩といっても、税金を払ってるんだから国がサービスをするのは当然です。師の恩といっても、私たちは授業料を払っているんです。親の恩といっても、生んでほしいと頼んだわけではない、勝手につくったもんだ。それよりお金が大事です。お金さえあれば何でも出来ます。恩なんて関係ありません。何といってもお金が一番です」

この言葉に檀家さんたちはビックリし、堂内は騒然となりました。

どのように管長さんは対応されるのか、皆が注目する中、管長さんは答えました。

「お前さん、いくら欲しいのか？」

予想外の言葉に驚きを隠せない大学生に、管長さんは続けて言います。

管長「一千万円か？一千万円ならやるぞ。その代わり条件がある」
学生「条件て何ですか？」
管長「お前さんの命をよこせ」
学生「一千万円位で命をやれるもんですか。金なんかで命は売れませんよ。冗談じゃない」

すると管長さん厳しい口調で、
「その大事な命は誰からいただいたものだ。父母だろうが。その命を育てたのは誰か。先生じゃないか。平和の国におられるのは誰のおかげか。お前さんは自分の事ばっかり言っているが、それは恩を忘れた餓鬼というもんだ。それが分からんやつはここから出て行きなさい」
と一喝したのです。

大学生は返す言葉もなく、その場に立ちすくしていたということです。

後日、この大学生は当時を振り返り「あの時、管長さんにお出会いし、厳しいご説法を頂き、本当によかったと思います。管長さんのおかげで目が覚めました」と語り、今は立派な社会人になっているとのことでした。

管長さんのおっしゃる通り、私たちは、お金には代えられない「命」をいただき、しかも、何時死んでもおかしくないその命が、無量無数の「おかげ」によって支えられているのです。

この「おかげ」を恩といいます。

仏教語辞典によれば「恩とは何がなされ、今日の状態の原因は何であるかを心に深く考えること」と、説明されていますが、「私が今の私になるためにどのくらい多くのおかげをいただいてきたか、そのことを心にとどめておく」ということでしょう。その代表的なものが、父母の恩、師の恩、衆生の恩、如来の恩の四恩です。

お経には「恩を知り、恩に報いることが人の人たる道である」と説かれていますが、まさに「恩」は、人間育成の大事な徳目として、私たち日本人の心に永く受け継がれてきたものです。

これは言ってみれば、「おかげを知る人間になりなさい」と教え継がれてきたのです。

ところが、戦後の民主教育の中で、この「恩」ということが、縦社会の論理で封建的思想だということから、すっかり尊ばれなくなり、さらには急激な経済発展により、「モノ優先」の社会になり、「心よりモノ」、「徳（恩）より金」という風潮が日本人の間に定着してしまいました。

先ほどの大学生が「恩など必要ない。何といってもお金だ」と言った背景にはこうしたことが大きく影響しているのです。

ここで大事なことは、「だから最近の若い者はダメじゃ」と非難するのではなく、「果たしてこの私はどうなんだ」と、自らを問い直していく「ご縁」にしていくということです。

そうして、「この私もそうだった」と、気づかせてもらうことが出来れば、まことに素晴らしいことです。

そこに、聴聞（仏さまの教えを聞く）の大切さがあるのです。

何度も何度も聴聞を続けていくうちに、大きなご恩に包まれていながら、そのことに思いをいたさず、「誰の世話にもなってない」「誰にも迷惑もかけてない」と、ご恩には程遠い思い上がった生き方をしている我が身の愚かさに気づかされるのです。

その愚かさは、決して時代や社会のせいではありません。
人間存在のもっとも深いところにある我執（自己中心性・自分が一番可愛いという心・エゴイズム）という煩悩に起因しているのです。

その愚かな我が身に気づく時、「あー、お恥ずかしいなぁ。申し訳ないなぁ」という慚愧の念が生まれてきます。
それと同時に、そんな愚かな私が無量無数のおかげに支えられてあることに、「ありがたいなぁ。もったいないなぁ」という感謝の念が生まれてくるのです。
そうして、これからは一つでも二つでもご恩に報いる生き方をさせてもらおうという念が生まれてくるのです。

この、慚愧と感謝の日暮しが「恩を知り恩に報いる」人生へとつながるのです。

念仏者にとって最も大きいご恩は何かと言えば、それは阿弥陀さまの大悲心です。

救われようのないこの私に向かって「我にまかせよ。必ず救う」と、無条件の救いを約束してくださった阿弥陀さまの大悲のお心こそは、何にも増して広大のご恩であります。

そのご恩に報いることが念仏者の責務であります。

また、この念仏のみ教えを、時代を越え、国を越え、伝えて下さった高僧方や多くの念仏者のご恩も忘れてはなりません。

親鸞聖人はその無上甚深なるご恩を仰ぎ次のような歌（ご和讃）を作られました。

如来大悲の恩徳は身を粉にしても報ずべし師主知識の恩徳も骨を砕きても謝すべし

ー正像末和讃ー

「身を粉にして」、「骨を砕いて」と詠われてあるように、そのご恩には命を懸けて応えていく、これが私たち念仏に生きる者の人生なのです。

どこまでも謙虚に、そうしておかげさまの心を失わず、お念仏を申す日暮しをさせていただきたいものです。

平成２３年９月　　「光明寺だより７４号」より